# 「現代教養日本語実践新聞」第３号の発行に向けて
# ――取材日記　1

今年も学生による新聞取材の季節がめぐってきた。「現代教養日本語実践新聞」第３号の発行に向けての取材である。

本学の現代教養学部には、「日本語表現実践論」（担当：髙橋茂美）という授業がある。１年次生の必修科目で、話す力・聞く力・書く力を身につける授業だ。１年次生は春セメスターの「日本語表現基礎論」と合わせて受講する。そして、学生は学内外の方々を取材し、新聞記事としてまとめる。１年間の学びの集大成だ。学生は、この授業で培った「相手に自分の考えを伝える力」、「相手を尊重しながら話す力」が試される。

2019 年（令和元年）11 月 15 日（金）。穏やかな晴天が広がったこの日、株式会社コトブキの代表取締役社長、小野広和氏が来学された。株式会社コトブキは、屋根瓦の工事やリフォームを取り扱う会社だ。本学からは近い場所にあるため、直接会社に伺い、お話を伺いたかったのであるが、受講生は約 50 名。会社へ伺うことを諦め、小野氏を本学へお招きしたのである。

午後４時過ぎ。131 教室に集まった学生が用意された取材シートを一人一部ずつ受け取って着席する。ざわめきが残る中、教室の入口にそっと立っている方がいた。小野広和氏である。

ご挨拶をすると、小野氏は黙々と準備を始めた。予め決めておいた司会進行役の３人の学生も教壇の近くに集まった。大教室も徐々に静かになっていく。

こうして、今年最初の取材は始まった。

会社の概要を話し始めた小野氏。学生に多くのことを伝えたいというお気持ちが伝わってきた。瓦屋根、断熱材、ドローン、白樺派カレー……小野氏が次々と繰り出す言葉に耳を傾けながら、学生は取材シートにメモを取っていく。ただ単にメモを取ればいいわけではない。話を聞きながら、後で見ても理解できるように整然と書かなければならない。メモを取る力も重要なのだ。

小野氏が持ってきた体験用の断熱材・遮熱材の前に学生たちが集まる。学生たちから驚きの声が上がった。こうなるともう小野氏のペースだ。学生から人生において大切なものについて質問が出ると、小野氏はご自身の経験から得たことを話してくださった。取材は当初 30 分間の予定だったが、気がつけば１時間以上の時間が経っていた。

瓦屋根、断熱材、ドローン、白樺派カレー……小野氏の話の一部を表す重要な言葉だ。これから学生は、小野氏の話を新聞記事として執筆する。「現代教養日本語実践新聞」第３号の紙面で、取材したことをお伝えしよう。

現代教養学部１年次生による「現代教養日本語実践新聞」第３号のための取材は、これからも続いていく――。

「現代教養日本語実践新聞」の問い合わせ先
中央学院大学現代教養学部
髙橋茂美
takahashis@fla.cgu.ac.jp